



果樹特報

No.5

平成 26 年 5 月 30 日
J A 中野市営農センター
J A 中野市りんご・もも部会

梅雨明けまでは、輪紋病・炭そ病・褐斑病の最重要防除期間です。6 月以降の散布薬剤は予防効果を前提としています。概ね 15 日間隔で進めますが、雨や曇天が続く場合は、前倒して散布するようにこころがけましょう。

果樹類で 5 月下旬からアブラムシ類、カメムシ類の被害が見られます。盛夏期を迎える前に主要害虫密度を低く保つことが重要です。下記の内容を参考にして今後の薬剤散布を進めてください。

りんご

6 月上旬の薬剤散布（前回より 15 日後）

◆ 散布日： 月 日

◆ 散布量： リットル

散布時期： 6 月 5 日～10 日 *注意事項①、②、③参照

散布薬剤： 水 1 0 0 リットル

展着剤 1 0 ml *注意事項④参照

アントラコール顆粒水和剤 2 0 0 g (45 日前、4 回)

スプラサイド水和剤 6 6 g (30 日前、2 回) *注意事項⑤、⑥、⑦参照

スイカル 1 0 0 g (カルシウム剤) *注意事項⑨、⑩参照

対象病虫害：黒星病・黒点病・斑点落葉病・褐斑病・炭疽病

アブラムシ類・シンクイムシ類・ハマキムシ類・カイガラムシ類・カメムシ類

10 アール当たり散布量： 600 リットル

【注意事項】 *必ずお読みください。

- ① 上記の散布時期は目安です。気象条件や各園の病虫害発生状況等を考慮して散布時期を決定してください。尚、不明な点は園芸技術課担当までお問い合わせください。（営農センター TEL 23-3933 まで）
- ② 6 月末まではサビの発生しやすい時期なので高温時の散布は避けること。
- ③ 5 月中下旬の薬剤散布が遅れた場合や 6 月に入り雨や曇天が続く場合は上記の日時より前倒しで散布する。
- ④ 通常展着剤（ハイテンパワー等）に代えて、固着性展着剤のアビオン E の 1000 倍を使用すると薬液付着効果が高まる。（詳しくは営農センター担当までお問い合わせください）
- ⑤ スプラサイド水和剤は劇物登録薬剤です。購入の際は印鑑をお持ちください。
- ⑥ スプラサイド水和剤に代えて、ダイアジノン水和剤 34 の 1000 倍（30 日前、4 回）でも良い。
- ⑦ カメムシ類の発生園は、アルバリン顆粒水溶剤 2000 倍（前日、3 回）を加用散布する。
- ⑧ シンクイムシ類・ハマキムシ類の多い地帯はコンフューザー R (100 本／10a) を 6 月 10 日頃までに設置する。
- ⑨ スイカル等のカルシウム剤は、ビターピット・果実軟化防止や果実からの油上がり予防、果実の日持ち性向上、新梢の徒長抑制などに効果がある。今回から 5～6 回連続して散布する。
- ⑩ スイカルに代えて、ストピットⅡの 500 倍を使用してもよい。ストピットⅡは、カルシウム成分の他に有機皮膜補助剤が混合されており、カルシウム補給と併せて幼果期の果面保護効果がある。尚、ストピットⅡの効果面・使用方法等不明な点は、園芸技術課担当までお問い合わせください。

◆ 次回（6 月中下旬）薬剤散布予定：6/20～25

引き続き、褐斑病・炭そ病やシンクイムシ類・ハマキムシ類対象の薬剤散布になります。

◆ りんご栽培管理情報は裏面をご覧ください。

◆ 予備摘果の基本要領

- ① つがる・秋映等の側果はサビが発生しやすいので、出来るだけ中心果を残すことが望ましいが、低温被害で中心果が欠落している場合や軸が極端に短い場合は、側果で素質の良い果実を残す。
- ② ふじは側果も利用できるので、肥大・果形を優先して1果そう1果にする。
- ③ ふじは早期に予備摘果を行うことが大玉生産につながり、隔年結果も防げる。（次年度の花芽形成に影響）また、着果量が不足している場合は、樹勢コントロールのため果形不良果でも着果させる。

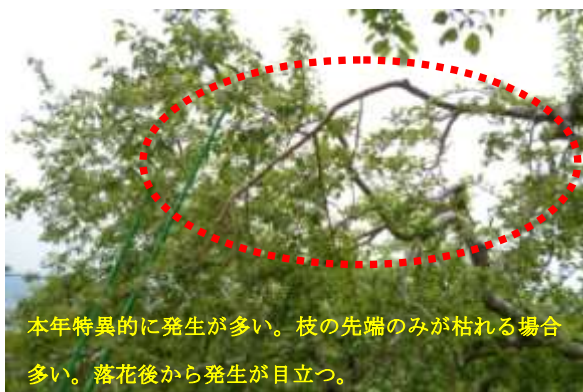
◆ 仕上げ摘果で残す果実

- ① 花そう葉が多い果実（光合成が活発となる）
- ② 果梗が長く太い果実（落果しにくい、傷がつきにくい）
- ③ 縦長で肩がはっているもの（大玉になる素質ある）
- ④ 果台が1～2 cmの果実（ふじの場合） ＊右図参照
- ⑤ 果台枝が15cm以下の果実（ふじの場合） ＊右図参照
- ⑥ 着果位置が良好な果実（収穫前の日当たりが良い果実）



◆ りんご 5月に目立った病害・生理障害

- ① 凍害（枝単位の枯れこみ）



26年度特異的に発生が多い枝単位の枯れこみ症状。枝単位の腐らん病とは異なり、目立った病斑がなく枯れこむ。中野市内では、5月に入り発生が目立つようになった。原因は、冬季の低温遭遇による凍害であると推測されている。尚、東北各県でも本年発生が多いとの報告がある。

- ② 枝腐らん



りんごの大敵腐らん病。本格的な生育に入り、発生が目立ってきた。左写真のように枝単位での発生も多い。近年は極細い枝にも発生が目立つ。腐らん病は、他の病害と違い、気温が低くても雨等により感染が広がる特異性を持つ。最大の感染期は梅雨であるので、それまでに病斑部の削り取りや抑制処理を進めたい！

- ③ ふじの果台が異常に長いもの（青玉・光玉除去対策）



ここ数年多い、ふじの果台が異常に長いもの。（理想は2 cm以内で止まること）温暖化により、秋の気温が高いため、8月で止まった芽が二次伸長したところに多い。この部分に結実した果実は、当初は大玉であるが、後に青玉・光玉になる可能性が高いので、仕上げ摘果までには除去したい。